

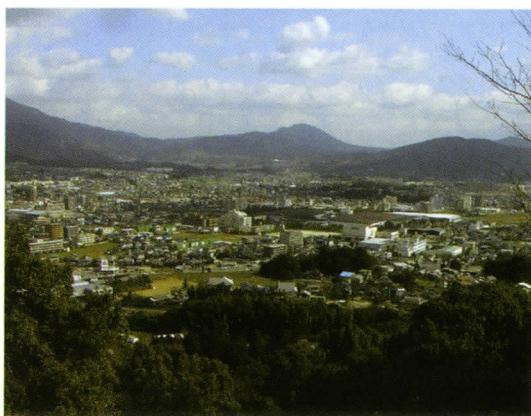
てんじんさま
天神様の徑

すがわらのみちざね

■菅原道真

延喜元年(901)1月25日、菅原道真は藤原時平、源光、藤原定国等の讒言により突如として右大臣兼右近衛大将の官職を解かれ、大宰權帥に左遷されました。身に覚えのない濡れ衣をさせられ、菅家一門、菅原院出身の官吏まで悉く配流左遷されました。官舍(南館)での厳しい生活が始まり、道真是傷心の余り紫藤瀧で身を浄め、熱心に天拝山頂から東方を遙拝し、国家安泰と自身の無実を天に訴えたといわれています。

しかし、悲観のあまり病に罹り、同3年(903)2月25日、59歳で亡くなりました。従臣の味酒安行は道真を手厚く安楽寺に祀りましたが、その後、京都で次々と異変が起きたので、人々は菅公の御靈の祟りではないかと恐れおののきました。そこで道真的官位を復し、北野天満宮を造営して一門を復職したところ不思議にも異変は治まったといわれています。没後90年目にして朝廷は左大臣正一位を追贈し、御靈を慰めました。



天拝山中腹の飯盛城跡からの眺め

ごじさくてんまんぐう

■御自作天満宮

武藏寺の西北150m程のところに、今も地域の人々に篤く祀られている神社があります。ご神体は菅原道真が武藏寺に籠って自ら彫ったといわれる等身大の木彫座像ですが、これには戦国時代の歴史が伝えられています。

天正14年(1586)4月14日、九州制覇を目論む薩摩の島津勢は大挙して武藏村落や武藏寺、天拝山に火を放ち、筑紫広門の端城である天判山城、堂の山城、飯盛城などを次々に攻略しました。そのとき「森の天神」と呼ばれた小祠も兵火に罹り、社僧や村人がやっとの思いでご神体の首部だけを持ち出しました。元禄5年(1692)、御笠郡惣司の立花勘左衛門増弘が仏師に命じて体部を彫み、焼け残った首部と合わせて、釈迦堂の焼け跡に社殿を建てて納めました。その社殿は横14m、奥行10mの桧皮葺、朱塗の円柱、紫宸殿造りで、社司の園智坊によって祀られていましたが、嘉永年間(1848~54)に出火し、縁起や絵馬までもが悉く焼失しました。武藏、塔原、二日市、太宰府の信徒たちは再建を計画しましたが、思うように寄付が集まらず、明治16年(1883)3月、規模を縮小して現在地に建設されました。その神殿も老朽化したため、昭和9年(1934)に再建されました。設計は著名な建築家で地元出身の三条栄三郎氏。棟梁は神吉藤吉氏。用材には桧が用いられ、小規模ながら瀟洒で格調の高い社です。



天神様の径起点

■天神様の徑

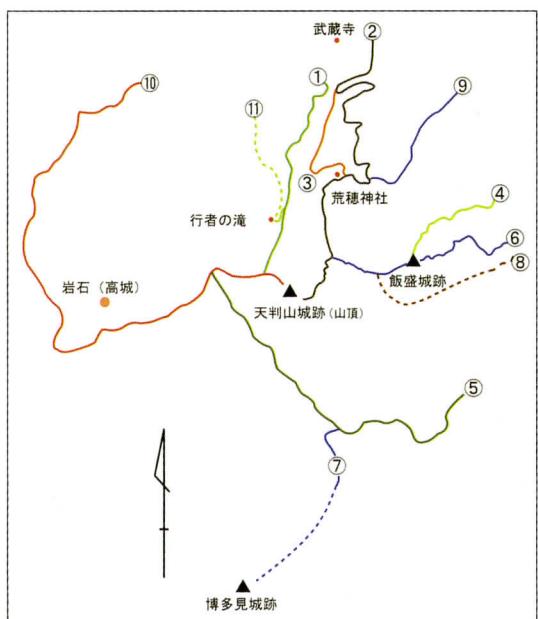
天拝山下宮の御自作天満宮の石階段左角から上宮まで、1025mの道程に約100m間隔で11基の歌碑が建てられています。それは菅原道真が詠んだ歌のなかから11首を選定したもので、筑紫野市商工会、同観光協会が中心となり、多くの関係者の協力によって平成9年10月25日に完成しました。起点の和歌は、道真が京を離れる日、宣風坊(左京五条の唐風の呼称)の屋敷の庭園に植えた梅に別れを惜しんで詠んだ「東風吹かば…」の有名な歌です。2合目から頂上までの歌碑は、太宰府謫居中に詠まれた和歌で『聖廟御集』に収められている21首のうちの10首です。いずれの和歌も寂しく悲しい道真の心情が伺える、感性豊かな心に染みる歌です。

■天拝山社

標高258mの天拝山頂にある天神社は、御神忌1100年大祭を迎える前年の平成13年、記念事業として拝殿が新しく建替えられました。そのときに板と板との間から棟札がみつかりました。それには「文久二年壬戌

八月上旬町奉行御造兼帶 濱兵太夫 喜多村安右門 立会役十境坊 御造営方浅田幸左エ門 村田普作」の墨書きがあり、139年間の風雪に堪えた社であることがわかりました。

(久芳康紀)



■天拝山頂に至る古道

- ①御自作天満宮前から左折し歌碑を訪ねる道(天神様の徑)
- ②荒穂神社を経由して九州自然歩道を登る道
- ③九州自然歩道を通り鳥居から石楠花谷に沿って8合目に通じる道
- ④武藏から飯盛城跡を経由し8合目に通じる道
- ⑤古賀の城ヶ原から九州自然歩道に出て尾根に登り右折して山頂へ向かう道
- ⑥武藏の門田蓮池土手を通り飯盛城跡を経由し8合目に通じる道
- ⑦山口の兎ヶ原から九州自然歩道を登り尾根を右折する道
- ⑧武藏の門田池南の小道を登り梅ヶ谷から山頂へ向かう道
- ⑨武藏の石見堂から荒穂神社へ登り九州自然歩道に出る道
- ⑩塔原の薩摩谷を登りつめ、岩石(高城)より尾根を東に行く道
- ⑪武藏寺裏手の薬師の滝、行者の滝を経て山頂へ至る道

*⑦⑧⑪の山道は、現在では通行困難です。